

# 言語の諸様相

生野金三

## I はじめに

我々人間は、自分がおかれた環境に適応しながら、政治・経済・文化・生産・宗教・教育等の各方面にわたる生活を営んでいる。そして、これらの生活を行うための根本的な手段として言語を使用している。注<sup>1</sup> 生活の根本手段である言語を使用している様相を見てみると、言語が自然に人間に与えられたものであるかの如く無意識に取扱っているように見受けられる。これは、我々が言語の働きについて自明であるかの如き見ているため、改めて深く立ち入る程の必要性を感じていないためである。

では、このような無意識の間に使用している言語を人間は生まれながらにもっているのだろうか、決してそうではない。人間は言語をもってこの世に誕生するのでなく、この世に誕生した時には言語をもっていないのである。このことは、大体生後一ヶ年前後までを「無言語期」注<sup>2</sup> と呼称することからしても明瞭なことである。無言語といえども泣き声・喃語等の音声を発生することは可能である。しかし、それは、我々成人の使用する言語音とはかなり異なったものである。したがって、この期は、いわゆる言語の準備期とも言うことができよう。

この期を終えて、言語を発する時期、つまり、始語期となるのである。これは、幼児が歩行し始めた時期と偶然にも一致していることを考慮する時、この時期の符合は興味があることである。このように幼児が片言ではあるが言語を喋るようになった時から、人間らしい世界へ直進していくことが可能となる。

子供は誕生と同時に人間社会の一員に加えられるが、周囲の人々や特に親の保護なしには、十分に成長することも十分に言語を喋る注<sup>3</sup> ことも不可能である。人々の保護や指導を受けながら成長するのであるが、その成長の過程において、身体的な発達を遂げると同時に様々の文化を周囲の人人から学び、それを体得していくのである。特に周囲の人々の使用する言語を学ぶことによって、子供は社会によりよく適応した一員となることができる。しかし、大半は、社会が必要とする言語を習得するのに、幼児時代の言語学習では不十分であって、学校教育において意図的な言語教育が行わなければ、社会生活を円滑に営むのに必要な言語能力を十分に伸長することは極めて困難である。したがって、意図的な言語教育が児童の言語能力を発達させるのに大きく貢献することは言及するまでもない。

例えば、更にこれを人間の教育において具現してみると、教師は児童・生徒に言語を教え、言語によって児童・生徒に何物かを教える。児童・生徒は教師より言語を学び、また、言語によって何物かを学ぶ、といったように言語なしには教育作用は行われ難いことからしても明瞭なことである。したがって、教育作用は、教師と児童・生徒との間における言語と言語との交換であるとも考える。

教育作用が言語を媒介として行われているということを念頭に置く時、教育作用の本質を理解する上にも、言語の様を理解するということが当然として欠くべからざる要件となる。このようなことから言語と教育とは一体不可分なものとならざるを得ないと考える。

このことは、ドイツの教育哲学者、ボルノー（O. F. Bollnow）が言語の現実性において、ハイデッカー（M. Heidegger）の「言語は存在の家である。人間はその住まいの中に住まう。」<sup>注4</sup>という言葉を用いて、「…言語を人間の本質の中心深く捉えること、そして人間をば話す存在として、また、その本質において言語によって規定された存在として理解するという、……」<sup>注5</sup>とし、また、「…世界は人間に対して、言語の像にしたがって形成されるのであり、……」<sup>注6</sup>とし、それから、「…人間も、また、言語において、その都度特別なしかたで形成されるのである。……」<sup>注7</sup>と述べていることからしても明瞭なことである。

上述したように、「言語の教育」を志向するに当たっては、まず、教育の本質を理解するのに欠くべからざるを得ない「言語の諸様相」を究める必要がある。以下、このことについて述べることにする。

## Ⅱ 言語の諸様相

言語の「諸様相」を把握するに当たっては、言語が人間生活において果たす役割、つまり、言語による精神形成、言語による社会形成、言語による文化形成という観点からみる必要がある。

このことは、取りも直さず、言語主体の立場から見ようとすることである。「言語」をもの（事物）と見ないで、「活動」「はたらき」としてのこと（現象）として捉えることである。<sup>注8</sup>

「言語」を「はたらき」として見る立場は、目的の考えを前提とすることであるから、言語の目的性を強調し、学習活動の場合においても、言語の使用される言語活動の生活的・精神的価値目標を強調することになる。畢竟言語を自己目的としないで、もっと、大きな目的を強調することから、「生活目的」とか「価値目標」とか言われる極めて重要な認識が生じてくる。

言語を「もの」と見ないで「はたらき」と見る立場は決して新しいことではない。近代の言語学の開祖といわれたドイツのフンボルト（K. W. Humboldt）によって言及されている。次にその説を引用する。

「…言語は死んだ産物と考へられることなく、却って進んで生産活動と見られねばならず、更に言語が対象の表示、理解の媒介としてもたらす結果を度外視して、むしろ注意深く内的精神活動と緊密に織りなされた言語の根源と、それら（精神活動と言語）の相互的影響〔言語が精神活動に及ぼす影響〕に立ち帰って考察がなされねばならない……。注9」

「言語をその現実的本質に於て理解するならば、それは絶えず瞬間毎に過ぎ去って行くものである。言語の文書による保存でさえも常に不完全な、木乃伊の如き保存にすぎないのであって、結局更めてそこに生きた言語の具象化されることが必要である。言語そのものは決して所産物（Ergon）でなく、むしろ活動性（Energeia）<sup>注10</sup>である。言語の真の定義に従って発生的なものでしかあり得ない。言語すなはち、分節された音声を思想の表現に高める精神の永遠に

繰り返される労作である……。注 11」

フンボルトは、言語は、エルゴンとして見るべきでなく、エネルゲイアと見るべきであると述べている。このことは、言語をたえず変化する活動性として見ていこうとする立場であって、言語を「機能」として捉えようとする立場と同じと考えることができる。

言語を機能として捉えようとする時、そこにはさまざまな捉え方があることは一般的に認められているが、ここでは言語をめぐる二つの領域、言語の意味機能と言語の伝達機能の面から把握していくことにする。

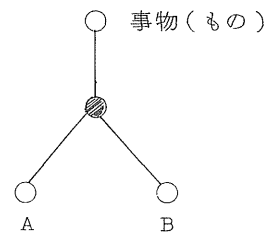
## 1. 言語の意味機能

言語記号を意味機能の立場から捉えているのは、ドイツの心理学者ビューラー(K. Bühler)の説である。以下、ビューラーのオルガノン・モデル(Organonmodell)について述べる。

ビューラーのオルガノン・モデルは、プラトン(Platon)が言語哲学的対話篇の中で、「言語は人が他人にあるところについて告げる手段である。」注 12 と言及しているところから取り上げた概念である。ビューラーは、記号の存在様式を言語の「器官モデル」によって捉えている。それは、ある人(A)が、別のある人(B)に対して、ある事柄について、というこれらの三つの要素は、第一図に示すように互いに結び合っているということである。

湊吉正氏は、ビューラーのオルガノン・モデルを引いて、次の 第一図(注 13) のように述べている。

「…言語は、「もの」と「ひと」(言語表出主体、言語受容主体)との中間者、それらを結合する媒介者として位置づけているとともに、「ひと」(言語表出主体)と「ひと」(言語受容主体)との中間者、それらを結合する媒介者として位置づけられているのである。このように、言語は、起原的にみても、



「もの」と「ひと」、「ひと」と「ひと」とを結合する二重の媒介者として、「ひと」が生活・文化の必要上創造し、また、それ自体そのような対物的機能と对人的機能とを同時に果たすものとして生成してきたものである。……注 14」

このように湊吉正氏は、畢竟言語が「もの」と「ひと」、「ひと」と「ひと」とを媒介し、結合する二重の媒介者としての機能を捉えることができ、ここに言語の媒介性を把握することができるとしている。

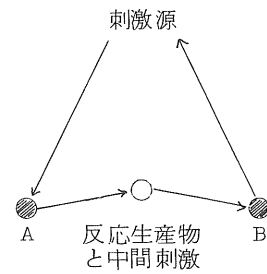
さらに、ビューラーは、具体的にAが雨のばらつく音を聞く、Bに「雨だ」と言い、Bはこの言葉を聞いて窓の外を見る、と述べている。これらの事象をより正確に表わそうとするために第二図を描いている。

第二図は、行為連鎖におけるA(初期刺激)とB(最終反応)との間に中間的連節を仮定している。この連節は媒介者の役割を果たしている。すなわち、反応であると同時に刺激でもある。

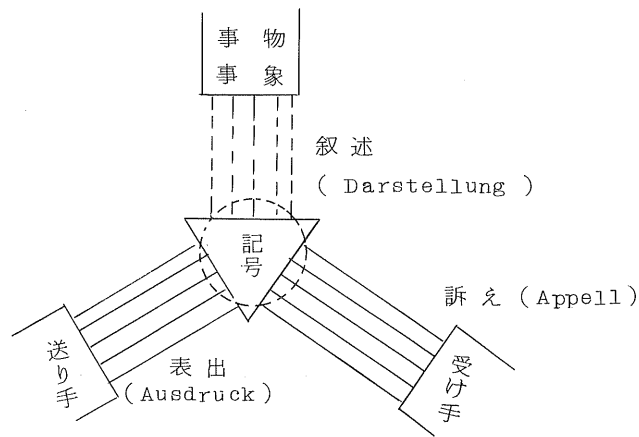
媒介理論では、従来、媒介連節は認知的なものでなく、純粹に反応→刺激の単位であるといわれてきたが、その後理論の精密化を進めた結果、連節は言語的であると考えられるようになった。したがって、ビューラーの示したこのモデルは、言語刺激に対する意味反応の過程を説明していると考えることが可能である。

ビューラーは、第二図を一步進めてより強力な、「言語のオルガノン・モデル」を構成している。ビューラーは、言語活動が行われるためには、第三図に示すように事物・対象と送り手

第二図（注 15）



第三図（注 16）



と受け手との三つの面が言語記号を媒介として相互に関係し合うところに生ずると言及している。

ビューラーは、事物・事象と送り手と受け手との三つの側面を三角形で表し、三つの面には、三つの言語記号様式を対応させている。

三つの言語記号のうち、事物・事象の側面は、「事物・事象」に対する従属の働き、つまり、代理的機能をもつことにあり、送り手の側面は、内的状態を表出している「表出者」への依存関係において症候であり、受け手の側面は、行動の指針としての受容者への信号である。

言語記号は、言語活動の場における三つの側面との関係において機能的に働くことによって意味記号としての力を発揮するのである。

したがって、叙述・表出・訴えの三つの言語記号は、言語の特殊的な機能であると考えることができる。

このような三つの側面は、中央の点線で示されている具体的な音響現象を記号のレベルまでに高めるのに必要な契機でもある。

ところで、言語記号の三様式を表している三角形と具体的な音響現象を表している円とは一致していないことが認められる。つまり、一面において、言語記号の三様式を示す三角形は、具体的な音響現象の円の内部に引っ込んでいたり、突き破っていたりしているのである。

三角形が具体的な音響現象の円に引っ込んでいる場合というのは、具体的な現象において、ある対象が記号として機能している場合、その記号の機能は、すでにある所有する尺度によって選び出される場合をいっているのである。つまり、音声のかたまりのある一部だけが記号の機能を持ち、他はすべて不適當であるということである。

反対に言語記号の三様式を表している三角形が、具体的な音響現象を示す円からはみ出している場合は、音響的データが直接感覚では不可能な何ものか、例えば、記憶や動機から生じる何ものかによって支えられているということである。つまり、感覚的に与えられたものはつねに統覚的補充をこうむることを示しているのである。

ビューラーは、人間の記号活動において、一つ一つの記号を問題とするだけでなく、その記号が置かれている状態、すなわち、記号的状況の間にも水準の差を与えている。畢竟言語活動の場において、言語記号が三つの側面との関係に応じて、働くことによって意味機能として力を発揮することになる。

以上が言語の果たす役割を記号論的立場より捉えているビューラーの言語観である。

## 2. 言語の伝達機能

ビューラーの言語に対する精神を踏まえ、彼の考えを深化する方向で、言語を伝達機能の立場から捉えているのが、アメリカの言語学者ヤーコブソン (R. Jakobson) である。ヤーコブソンは、伝達行為そのものに内属する行為を、話し手がそれとは別に抱いている意図やくわだてとは別個に決定することが問題であるとしている。

以下、ヤーコブソンの捉えている言語の伝達機能をみていくことにする。

ヤーコブソンは、言語伝達行為に含まれる構成要因として、発信者 (addresser) ・受信者 (addressee) ・メッセージ (message) ・コード (code) ・文脈 (context) 、そして、対話者の間に成り立つ接触 (contact) の六つを捉えている。伝達に不可欠のこれらの要因は、次のように図式化している。

発信者 (メッセージの符号者) は受信者 (メッセージの復号化者) にメッセージを送る。メッセージが有効であるためには、まず、そのメッセージによって指示されるコンテキストが必要である。これは受信者が捉えることのできるものでなければならない。したがって、コンテキストは、言葉の形をとっているか、あるいは言語化され得るものである必要がある。それは、このような時、受信者がコンテ

コンテキスト 注 17

メッセージ

発信者……………受信者

接 触

コ ー ド

ストを媒介として復号化が可能となるからである。次に、メッセージはコードを要求する。これは発信者と受信者との双方に全面的に、あるいは少なくとも部分的に共通するものでなければならない。さらには、メッセージは接触を要求する。これは、発信者と受信者との間の物理的回路・心理的結合で、両者をして伝達を開始し、持続することを可能にするものである。

以上述べたような六つの要因の一つ一つが、それぞれ言語の機能を規定するのであるが、これらの言語の六つの基本的な相を区別しても、そのうちのただ一つの機能しか果たさないような言語のメッセージを発見することは不可能である。つまり、多様性はこれらの機能のいずれかの一つの専制にあるのではなく、六つの機能の相互の階層的な異なりの中に存在するのである。したがって、発信者から受信者へのメッセージの主たる任務が、コンテキストの方向づけであるとしても、メッセージにおける他の諸機能の付随的参画を十分考慮すべきであると考えられる。

このような言語伝達に不可欠な六つの要因を基にして、ヤーコブソンは、言語の伝達機能として第四図のような心情的機能 (emotive function) ・動能的機能 (conative function) ・関說的機能 (referential function) ・詩的機能 (poetic function) ・交話的機能 (phatic function) ・メタ言語的機能 (metalingual function) を捉えている。

		第四図 (注 18)		
	関 説 的 機 能		動 能 的 機 能	
心 情 的 機 能	詩 的 機 能			
	交 話 的 機 能			
	メタ言語的機能			


第四図の心情的機能は、注 19 発信者に焦点が合わせられており、話の内容に対する話し手の態度の直接的表現を目指し、それはある心情を印象づけようとするものである。

言語の純粋に心情的な層は間投詞

(感動詞・感嘆詞)によって代表される。間投詞は、間投詞独特の音序列を持ち、間投詞以外には見られないような音声さえも存在する。さらには、間投詞は文の一成文というよりもむしろ完全な文に相当しているといえる。

心情的機能は、このように間投詞において露出されるが、あらゆる発話には音声・文法・語彙のレベルにおいて多かれ少なかれ色彩を付与している。

受信者への指向に焦点を合わせているのが動能的機能注 20 である。これは、呼格および命令法に最も純粋な文法的表現を見出す。命令文は、基本的に平叙文と異なる。つまり、後者の平叙文は、「真か偽か」という設題に付されることが可能であるのに対して、前者の命令文は、真偽に対して付され得ないのである。例えば、ヤーコブソンはオニールの戯曲泉 (The Fountain) の場面を取り上げて次のように説明している。

ナノが激しい命令口調で、「飲め、」というところがあるが、この命令文には、「真か偽か」という問いは投げかけることはできないとして、それに反して、「飲みました」「飲みます」「飲むでしょう」等の問いは、完全な文として発することが可能であるとしている。また、平叙文は命令文と異なり、「飲みましたか」「飲みますか」「飲みましょうか」等のように疑問文

に転換することも可能であるとしている。

コンテキストに焦点が合わせられているのは、関說的機能である。言語による伝達においてはしばしば言語外の現実を対象とすることがあるため、発信者はこの現実を構成する諸対象を指示することができなければならない。それが言語の関說的機能である。ある表現によって指示された一つの、あるいはいくつかの対象が、その表現の指向対象を形成するのであるが、これは必ずしも現実の世界であるとは限らない。

以上の心情的機能・動能的機能・関說的機能は、ビューラーの言語行動についての伝統的なモデルにおいても認められるが、ヤーコブソンは、言語伝達において上記の機能以外に三つの構成要因とそれらの三つの要因に対応する三つの言語機能を観取している。

ヤーコブソンが観取している言語の機能とは、接触そのものを指向している交話的機能とコードそのものに焦点が合わせられているメタ言語的機能とメッセージそのものへ焦点が合わせられている詩的機能の三つである。

影まず、交話的機能<sup>注 21</sup> について述べることにする。この交話的機能は、儀礼化した挨拶のしい遣り取りやただ会話をやたらに引き延ばすことを唯一の目的とした対話等に認められる。その最適の例として捉えているのは、新婚旅行に來た若い夫婦の会話である。次に若い夫婦が新婚旅行で目的地に着いた際の会話を考えてみる。

彼「さて」 彼女「ええ」 彼「着いたよ」 彼女「着いたのね」 彼「そうさ、やっと來たんだよ」 彼女「ええ」 彼「うん、そうさ」

この両者の会話の中には、「さて」「ええ」「そう」「うん」のような言葉が多くみられる。これらの言葉は、局面を変えて話を説き起こしたり、相手の言うことに対して頷いたりする働きがある。若い夫婦の会話は、「さて」「ええ」「そう」等の言葉によって極めて効率的に伝達が行われている。それは、メッセージの中において、これらの言葉が、伝達を開始したり、延長したり、相手の注意を惹いたりするのに極めて役に立っているからである。また、この両者が対話との間の接触を成り立たせて、それを維持するための努力がみられるからである。

このように伝達を開始し、それを継続しようとする努力は、人間の言葉を真似する鳥に特徴的にみられる。また、これは幼児が獲得する最初の言語機能である。したがって、幼児には情報を持ったメッセージの発信や受信ができるようになる前に、すでに伝達を行おうとしたことが認められるのである。

次に、コードそのものに焦点が合わせられているメタ言語的機能<sup>注 22</sup> について述べる。これは、発信者および受信者が相手と同じコードを使用しているかを確認する必要があるたびにごとくに発揮される機能である。それは、受信者が発信者のコードに対して、「分かりませんねえ、どういう意味なのですか。」と尋ね、あるいは、発信者は、受信者が聞き返すのを予想して、「私のいうことはお分かりですか。」と尋ねたりする場合である。これを具体的な場面、つまり、「ある二年生が試験に落ちた。」という内容を受信者(B)が発信者(A)から理解する場面の対話を考えてみる。

A 「あの二年生 ( sophomore ) は、ドッペッタ ( plucked ) そうだよ。」

B 「pluckedって何だい。」

A 「pluckedっていうのはスペッタ ( flunked ) っていうことさ。」

B 「その flunked っていうのは。」

A 「flunked っていうのは試験に落ちる ( to fail in an exam ) っていうことだよ。」

そこで、Bは、sophomore という言葉を全然知らないため、次のように聞き返した。

B 「だけどその sophomore っていうのは何だい。」

A 「その答えは、二年生という意味さ。」

会話の最初の段階においては、両者の間に共通なコードが使用されていないことが認められる。発信者のコードに対して、まず、受信者は、自分のコードにない「plucked」について聞き返している。それを受けて発信者は、「plucked は flunked である。」と説明しているが、この「flunked」も受信者は知らないため、さらに聞き返している。そして、発信者の「to fail in an exam」という説明で、受信者は、当初の「plucked」の意味を理解し得るのである。

次に、受信者は、「sophomore」について聞き返している。これに対して、発信者は、「二年生という意味である。」と説明を加えている。これによって、受信者は発信者の「sophomore」を受信している。

このように発信者と受信者とが、相互にコードを確認し合うことによって、両者のコードが同一のものとなってくる。このような言語学習の過程は、幼児が母国語を習得する際に顕著に見られる。

最後は、メッセージそのものへ焦点が合わせられている詩的機能<sup>注 23</sup> についてである。詩的機能を詩の世界だけに局限しようとしたり、もしくは詩を詩的機能だけに限定しようとする試みは誤った過度の単純化に落ち込むことになる。したがって、詩的機能は言語芸術の唯一の機能ではなく、ただその支配的な機能である。一方、他の言語活動においては、副次的・付随的な成分として活動する。

以下、「アイクを愛す」( I like Ike ) という簡潔な構造のスローガン为例に詩的機能について考えてみる。

このスローガンは、三個 ( I like Ike ) の単音節語から成り、三個 ( ay layk ayk ) の二重母音を数えることができる。第一の語には子音音素が含まれず、第二の語では両端の子音音素が二重母音をはさんでのり、第三の語では語末の子音が一つあり、三語の組み立ては変化に富んでいる。そして、三音節の二つのコーロンは互いに脚韻を踏み、しかも、韻を踏む二語のうち第二のもの ( ayk ) は、第一のもの ( layk ) の中に完全に包まれていて、対象を全面的に包含している類音法的な詩的手法がみられる。また、頭韻を踏む二つのコーロンもみられる。第一のもの ( ay ) は第二のもの ( ayk ) に包含されていて、愛する主体が愛さ



れる客体に包み込まれていて類音法的な詩的手法がみられる。このスローガンは、類音法という副次的な詩的機能によって、その重みと効きめを補強していることが認められる。

以上が言語を伝達機能の立場から捉えているヤーコブソンの言語観である。

### Ⅲ おわりに

言語をめぐる二つの領域、つまり、言語の意味機能と言語の伝達機能について捉えてきたが、このことは言語教育を考える時不可避の作業であることは言及するまでもない。言語教育の理念が全人格の完成を志向することにあると考えるならば、言語そのものが人間全体の中で果たす役割について捉えることが前提となる。ここでは、二つの領域のみに焦点を当てて捉えてきたが、他の観点からも捉えておく必要がある。このことは、今後更に追究していくことにする。

- (注1) 『国語教育概説』 藪手重則 鹿児島国語教育研究会 P.24
- (注2) ビューラー( Böhler ) 夫人の調査や武政太郎氏の調査によって、誕生の月を中心に前後二ヶ月に始語期のあることが分かる。『幼児の言語と教育』 高橋 巖 教育出版 P.49
- (注3) インドの奥地ゴダムリ( Godamuri )村で発見された「狼っ子たち」(Wolfchildren) は発見された時、人間の音声をもっていなかった。彼女らは、何も喋れなかった。なんの音声も口から出てこなかった。『野生の記録1 狼に育てられた子』 T. A. L. シング/中野善達他訳 福村出版 P.89
- (注4) 『言語と教育』 O. F. ボルノー/森田孝訳 川島書店 P.8
- (注5) 注4 P.9
- (注6) 注4 P.208
- (注7) 注4 P.208
- (注8) 注1 P.11
- (注9) 『言語と人間』 フンボルト/岡田隆平訳 創元社 PP.81~82
- (注10) 注9 P.221
- (注11) 注9 P.84
- (注12) 『コトバの科学1 コトバと人間』 小林英夫他 中山書店 P.12
- (注13) 『詳説言語心理学』 H. ヘルマン/小熊均訳 誠信書房 P.21
- (注14) 『表現学論考』 今井文男教授還暦記念論集刊行委員会 P.24
- (注15) 注13 P.22
- (注16) 注13 P.22
- (注17) 『一般言語学』 R. ヤーコブソン/川本茂雄訳 みすず書房 P.188
- (注18) 注17 P.194
- (注19) 注17 PP.188~189

- (注20) 注17 P.190  
(注21) 注17 P.191  
(注22) 注17 P.192  
(注23) 注17 PP.192～193

#### 参 考 文 献

- 1 『言語学のすすめ』 田中春美他 大修館
- 2 『幼児のための言語教育の心理』 小島潔 学芸図書
- 3 『新日本語講座10 ことばと文化・社会』 波多野完治他 汐文社
- 4 『言語と人間』 藤永保他 東海大
- 5 『現代教科教育学大系2 言語と人間』 倉沢栄吉・野池潤家編著 第一法規
- 6 『興水実独立講座 国語科教育学大系1』 興水実 明治図書
- 7 『国語教育論ノート』 湊吉正 明治書院
- 8 『言語機能の形成と発達』 村井潤一 風間書房
- 9 『現代の言語学(上)』 J.ライオンズ/田中春美訳 大修館
- 10 『言語理論小事典』 O.デュクロ・T.トドロク/滝田文彦他訳
- 11 『ローマン・ヤーコブソン選集2 言語と言語科学』 服部四郎編 大修館

#### 編 集 後 記

「人文科教育研究Ⅶ」をお届け致します。皆様方の御厚情によりまして、第Ⅶ号の紀要を刊行することができましたことに対しまして、改めて感謝申し上げます。

今回の紀要は、筑波大学に移転してからは創刊号ということにもなります。(研究体制も従来のものを整理発展させるべく、今年度より新しく「人文科教育学会」を発足させました。)この記念すべき紀要に対して、巻頭には石井庄司先生の貴重なお言葉をいただいて、紀要に一段の重みを加えることができたことを喜んでいます。

ご多忙の折、快く寄稿して下さった皆様には、厚くお礼を申し上げます。

(小田切ちづる 山川信一 生野金三 望月善次)

以 上